

肥育中後期に濃厚飼料の6割を玄米で代替

1 はじめに

本県ブランド牛である若狭牛の肥育経営の生産コスト低減を図るため、県内で生産された飼料米を最大限利用し、肥育中後期に濃厚飼料の6割を玄米で代替給与した場合の肥育牛への影響を明らかにしました。

2 濃厚飼料の6割を玄米で代替した肥育が可能

肥育前期（10カ月齢）から破碎玄米を給与し馴致した後、肥育中後期（15カ月齢以降）に濃厚飼料の6割を破碎玄米で代替給与しました。

玄米も含めた濃厚飼料の1日1頭あたりの原物摂取量は、10kg前後の摂取が見られ、出荷前の体重に差はありませんでした。

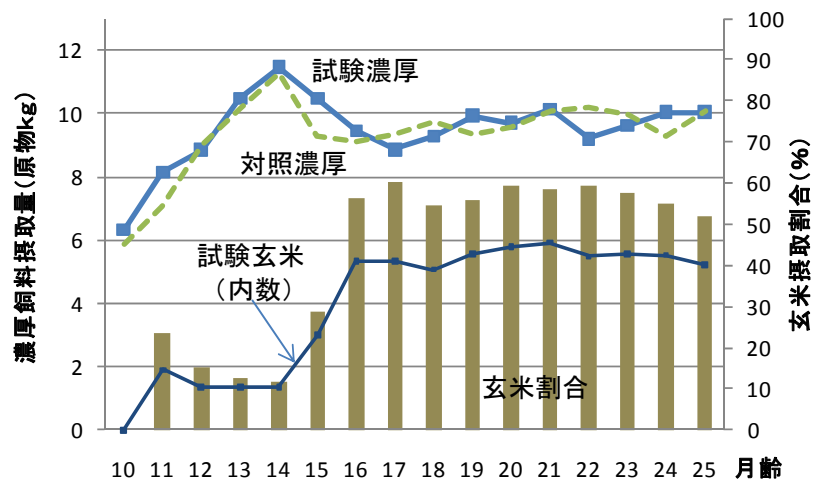


図1 濃厚飼料摂取量および玄米摂取割合

3 玄米の粗破碎とビタミンAの管理大切

玄米は加工をしないで給与すると消化率が低いため、少なくとも粗い破碎は必要です。

また、血液成分値は大きな違いはありませんが、血中ビタミンA値は低めで推移しますので、肥育後期においては個体の観察や栄養管理を十分に行う必要があります。

4 技術の効果およびコスト

枝肉成績については、試験区、対照区ともに上物率（A5、A4の比率）が60%であり、肉質に差は見られませんでした。肉色（BCS）については明るい傾向、脂肪酸組成についてはリノール酸が少ない傾向がみられました。玄米を給与した牛のお肉は、脂肪酸の含有比率から、体にやさしいお肉と思われました。（図2）

1頭あたりの肥育に要する飼料費（470日間）は、玄米の単価を税込31.5円/kg、配合飼料単価を税込60円/kgとすると、16%の飼料費削減が見込まれます。

ぜひ、県内産飼料米を多くの方に使っていただき、肥育飼料の県内自給率向上を図っていただきたいと思います。



図2 飼料米給与牛の肉質

（畜試 肉牛バイテクG 野村）